令和８年度自己評価計画

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	実施状況の達成度判断基準	判定基準	備考
1　生徒指導の方針・基準に一貫性を持ち、社会の変化に柔軟に適応しつつも、毅然とした指導を徹底することで、基本的な生活習慣の定着と規範意識の高揚を図る。	①　挨拶や所作、マナーの指導を、ＳＴ・集会・学校行事・生徒課での指導等で行う。さらに、「鶴高挨拶運動」で指導する。	生徒課生徒指導 各学年	前年度末の調査では、自発的に挨拶を行う生徒の割合は85.1%と良好な推移を見せている。今後はこの実績を維持しつつ、学校全体でより活気ある雰囲気を醸成することが課題である。挨拶を単なる礼儀作法に留めず、良好な人間関係の構築やチャレンジ精神の向上に資する教育活動の根幹として位置づけ、その意義を生徒に浸透させる必要がある。 具体的には、生徒会や風紀委員会との連携を強化し、挨拶運動をさらに拡充する。行事や集会等のあらゆる機会を通じて、挨拶が自己肯定感や目標達成に繋がることを継続的に説き、意識改革を促していく。安心して積極的に挨拶を交わせる環境を整えることで、学校生活における充実感や自己有用感を醸成し、活気ある校風の確立を図る。	【成果指標】 来校者・教職員、地域の方、友人・クラスメートに明るく元気な声で挨拶・お辞儀等ができる。	学校に関係する方々にはもちろん、生徒間の挨拶ができる生徒の割合が、 A　90%以上 B　85%以上90%未満 C　80%以上85%未満 D　80%未満	毎月、生徒の実態を把握し、割合が5ポイント以上減少した場合やD判定が出た場合には、原因を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 （生徒アンケート）
	②　日常の観察の中で生徒の状況とそれに対する指導方針を共有し、全教職員が積極的に指導にあたる。	生徒課生徒指導 全教職員	服装容儀や規範意識の向上に向けた教員の積極的な声掛けは、肯定的な回答が93.8%（前年度比6.3ﾎﾟｲﾝﾄ増）に達し、多くの教員が意識を高く持っている。今後はこの傾向を維持しつつ、生徒個々の状況や指導方針をさらに精緻に共有し、全教員が指導しやすい環境を構築することが求められる。 具体的には、職員連絡会や校内研修等を通じ、効果的な声掛けの事例や指導のポイントについて継続的に共通理解を深める。組織的な意識統一を図ることで一貫性のある指導を実践し、日常的な関わりの中で適切な身だしなみを定着させる。これにより、社会生活の基盤となる高い規範意識と、自律的に自らを律する態度の育成を推し進めていく。	【努力指標】 積極的に生徒への声かけを教員が協力して行っている。	服装容儀等について積極的に声かけをしている教職員が、 A　95%以上 B　90%以上95%未満 C　85%以上90%未満 D　85%未満	毎月、生徒の実態を把握し、割合が5ポイント以上減少した場合やD判定が出た場合には、原因を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 （教職員アンケート）
	③　学校生活の重要性を伝えながら、学校生活全般が充実感をもって過ごせるよう個々の指導に努める。1日のよいスタートをきれるように、5分前登校の重要性を粘り強く指導していく。	生徒課生徒指導 教務課 保健厚生課 各学年	前年度、年間3回以上の遅刻者が77名と大幅に増加した。反省文を通じた指導を継続しているが、遅刻の背景は「不登校傾向」や「生活習慣の乱れ（スマートフォンの長時間利用等）」等、多様化・複雑化している。個々の要因を詳細に分析し、それぞれの課題に応じた実効性のある改善策を講じることが急務である。 具体的には、生徒一人一人と対話を重ね、本人が納得感を持って改善に取り組めるよう丁寧な聞き取りを実施する。生活習慣の記録やスマートフォン等の利用状況の把握を通じ、課題の明確化を図る。担任、学年、部活動顧問が緊密に連携する組織的な指導体制を構築し、家庭とも情報を共有しながら、生徒の登校意識の向上と規則正しい生活習慣の確立に向けて粘り強く指導を展開する。	【成果指標】 遅刻指導を通して生活が改善し、3回以上遅刻を繰り返さないようにする。	年度内で３回以上遅刻した生徒の数が、 A　45人未満 B　45人以上50人未満 C　50人以上55人未満 D　55人以上	Ｄの場合、指導の方法を再検討する。	月ごとの集計記録を整理して、前年度の年間総合計に基づいて評価する。
	④　「いじめ・不登校問題対策委員会」等で生徒情報を共有し、全職員が連携して「いじめ」が根絶されるよう努力する。	生徒課生徒指導 保健厚生課 全教職員	いじめがなく安心できる学校であると感じている生徒の割合は89.9%（前年度比4.4ﾎﾟｲﾝﾄ増）と向上した。この傾向を維持・発展させるため、教職員間で「いじめを絶対に許さない」という強い意識を再共有し、予測的見地に基づく未然防止や早期発見の精度を高めることが課題である。また、心身の調和を保つための生活習慣（睡眠時間の確保等）の指導や、自他を尊重する心の醸成を、安全管理の一環としてさらに強化する必要がある。 取組内容としては、学期ごとの生徒・保護者対象アンケートや、面談時間を拡充した「面談週間」を継続し、いじめの予兆把握と積極的認知を徹底する。ネットトラブル防止教室や各種講話においては、実施後の振り返りを充実させ、生徒自身の抑止意識を向上させる。予測的情報発信や命の尊厳に関する指導を通じ、安全危機管理意識を全校で共有することで、誰もが安心して学べる教育環境の充実を図る。	【満足度指標】 「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が高い。	「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が、 A　90%以上 B　85%以上90%未満 C　80%以上85%未満 D　80%未満	Ｄの場合、指導の方法を再検討する。	7月、12月に調査する。 （生徒アンケート）
	⑤　学校の環境美化に積極的に努め、校舎内外の環境美化にも取り組むよう指導する。	保健厚生課 生徒課特活 全教職員	前年度のアンケートで、環境美化に積極的な生徒の割合は72.4%（前年度比4.8%減）に留まり、意識の低下が課題となっている。清潔な教育環境を維持するため、教室や校庭等の美化に対する生徒の当事者意識を再び高める必要がある。 整備委員会による定期的な「クリーン作戦」の実施や、放送・掲示物による啓発活動を強化する。また、学校生活全般を通じて全教職員による組織的な声掛けを行い、生徒自らが環境を整える姿勢を育む。これらの取組により、生徒の美化意識を向上させ、校内美化の推進と良好な学習環境の確立に努める。	【成果指標】 校舎内外の環境美化にも積極的取り組む。	校舎内外の環境美化にも取り組んでいる生徒の割合が、 A　85%以上 B　80%以上85%未満 C　70%以上80%未満 D　70%未満	Ｄの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 （生徒アンケート）

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	実施状況の達成度判断基準	判定基準	備考
2　生徒が安心して学べる授業づくり（授業規律の維持、授業のユニバーサルデザイン化）を推進するとともに、家庭学習の習慣化や読書活動の推進を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現と学力向上を目指す。	①　毎月の教育相談委員会で報告される生徒情報を、学年会で共有し、より深く把握できるようにする。担任が掴んだ生徒の進路希望を教科会でも共有し、適切に支援できる能力の向上を目指す。	教務課 各教科 教育相談課	学習環境や家庭状況、入試時の配慮事項など、多様な課題を抱える生徒への早期対応が求められている。個々の情報は存在するものの、それらを組織的に集約・共有し、全教職員が共通理解の下で指導にあたる体制をさらに強化する必要がある。複雑化する生徒課題に対し、迅速かつ的確な支援を行うための連携の質向上が課題である。 会議や打ち合わせの場を通じて教職員間の情報を繋ぎ、多角的な視点から個々に最適化した指導を実践する。組織的な情報共有を徹底することで、特別な配慮を要する生徒への的確な学習支援および生活指導を確実に推進する。	【努力指標】 教職員は個々の生徒理解に努めた上で、学習指導を行う。	個々や集団に応じた授業を行うために、担任や学年団・教育相談などと生徒情報を相互に共有している教職員の割合が、 A　95%以上 B　90%以上95%未満 C　85%以上90%未満 D　85%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 （教職員アンケート）
	②　生徒が主体的に学習に取り組む力を身に付けるために、１人１台端末の効果的な利用や、話し合いや発表の場面を多く取り入れる。また、そのための方法を各教科で検討する。	教務課 各教科	授業態度は落ち着いているものの、受け身である生徒が少なくなく、理解したことや習得したことを活用したり探究したりする力の育成が課題である。個々の教科でなく学校全体で、生徒の探究活動のスキルを身に付けることを進路指導とも連携し、ICT機器の活用や協働学習を通して授業への主体的参加を促す教員の指導スキルの向上等、校内研修や指導体制を整備していく必要がある。また、進路実現に不可欠な対話力や論理的思考力を養うため話し合い等のスキルを養う指導体制の整備も求められる。	【満足度指標】 習熟度別や選択授業、１人１台端末を利用した学習を検討し、生徒が主体的に学習活動に取り組んでいる実感が持てるように	発表や話し合い活動など、積極的に授業に参加したと答えた生徒の割合が、 A　90%以上 B　85%以上90%未満 C　80%以上85%未満 D　80%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 （生徒アンケート）
	③　個に応じた進学指導、就職指導を充実させることにより、自尊感情を育み、希望進路の実現を果たせるよう努力させる。	進路指導課 3年学年会 各教科	前年度、第一志望校への合格を果たせなかった生徒が約10%に上ったことを受け、今年度はその改善を最優先課題として取り組む。進路指導課・学年・教科がこれまで以上に緊密に連携し、生徒一人一人の特性と学力を正確に把握することで、個々に最適化した指導を展開していく。 就職に関しては、生徒本人の適性を最重視した進路選択を推進する。保護者や外部専門機関との連携を強化するとともに、適性診断を随時実施することで、自己理解を深めさせる。これにより、ミスマッチを解消し、同一企業への長期定着を前提とした就職指導を実践する。	【成果指標】 国公立大学合格者１名以上、第一志望校合格者90%以上、就職内定率95%以上を達成する。	３つの成果指標のうち、 A　３項目達成 B　２項目達成 C　１項目達成 D　すべて達成せず	Dの場合、目標設定の検討、指導方法等を検討する。	最終進学・就職状況の調査で評価する。
	④　家庭学習調査を行い、その状況を分析し、課題の出し方を適切に工夫したり、担任が面談したりすることで家庭学習の習慣を身に付けさせることにつなげる。	教務課 進路指導課 各学年	家庭学習の必要性を自覚し、取り組むことができる生徒は約半数に留まっており、学習習慣が定着しているとは言い難い。一人一人の特性に応じた課題提示により、学ぶ喜びを実感させ、学習意欲を喚起することが求められる。しかしながら、教職員の限られた人員や時間の中で「個に応じた指導」を徹底するには限界がある。そのため、ICT機器を効果的に活用して学習管理を効率化するとともに、生徒自らが学習時間を自己管理できる体制を構築することが喫緊の課題である。	【満足度指標】 担任・教科担当・部顧問と連携し、学習と部活動の両立を実践させる。	家庭学習の時間を確保している生徒の割合が、 A　60%以上 B　50%以上60%未満 C　40%以上50%未満 D　40%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 （生徒アンケート）
	⑤　情報科、商業科における各種検定・資格取得を推進するとともに、より上級資格取得に向け挑戦する意識付けと対策講座等、指導体制の充実を図る。	情報科 商業科	前年度全商各種検定合格実績（ビジネス系在籍数：3年生28名、2年生16名、計44名） 検定種目　1級合格数　2級合格数　3級合格数 ビジネス計算　8名　26名　40名 ビジネス文書　5名　28名　34名 情報処理　1名　24名　37名 商業経済　5名　23名　－ 上位級・多種目取得状況 1級取得(多冠)内訳 3冠：2名 / 2冠：4名 / 1冠：5名（上位取得率 9.0%） 複数種目合格率 2級2種目以上：3年生22名 / 2年生9名（全体 70.4%） 3級2種目以上：3年生24名 / 2年生13名（全体 84.0%） 早期から進学・就職の展望を具体化させ、資格取得の必要性に対する自覚を促す。検定合格の成功体験を積み重ねることで自己肯定感を高め、上位級への挑戦意欲を醸成していく。また、生徒の習熟度に応じた個別指導を拡充し、上位資格取得に対する強い意欲を持続させ、取得実績のさらなる向上と進路実現への資質向上を図る。	【成果指標】 各種検定資格の取得率が増加している。	ビジネスコースに在籍する生徒を対象に、各種検定各級取得率が、 A　1級2種目取得率30%以上 B　2級2種目取得率50%以上 C　3級2種目取得率70%以上 D　ＡＢＣ未満 ※各検定級合格者数／コース人数	Dの場合、結果を分析し、学習意欲喚起の方策、指導体制等、改善策を検討する。	各種検定の合格状況を調査する。
	⑥　学校図書室の取り組みを活性化し、積極的に読書に取り組ませる。朝学習や授業を利用して読書を取り入れ、本に触れる機会として図書館での貸し出しを促す。	教務課（図書担当）	図書貸出冊数は1,423冊に達し、前年度比17.3%増と大幅な伸びを見せた。この要因は、新設した「クラス文庫」により読書への物理的・心理的障壁が低減されたことにある。教室での身近な読書体験が図書館利用の呼び水となり、全校的な活動の活性化に繋がった。また「利用者カード」の配付や「蔵書検索・予約サイト」の開設により、利便性が向上したことも実績を後押しした。 引き続きクラス文庫を活用し、日常的に活字に親しむ環境を維持する。また、学習支援機能を強化し、授業単元の進度に応じた資料展示を行うことで、生徒の「主体的な深い学び」を支える。さらに進路関連資料を拡充し、進路検討の場としての機能も充実させる。デジタルとアナログ両面の整備を推進し、自発的な読書習慣の定着と進路実現への支援に努める。	【成果指標】 ガイダンスでの本の発見や、教科のみならず、朝読書などを通して、本に触れる機会が促がされ、読書量が増加している。	図書室での年間貸出冊数が、 A　1,400冊以上 B　1,200冊以上1,400冊未満 C　1,000冊以上1,200冊未満 D　1,000冊未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	年度末に集計する。

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	実施状況の達成度判断基準	判定基準	備考
3　教育活動の速やかな情報発信と地域社会と連携・協働した活動を展開することで、家庭や地域との信頼関係を深め、地域に根差した魅力ある学校づくりを推進する。	①　中学生やその保護者及び地域の方々に対し、従来のホームページ発信と共に、SNS学校アカウントを運用し、学校行事や部活動の大会情報、日常の学校生活等を、よりタイムリーに公開することで本校への理解を深め志願者の増加をめざす。	総務課	ホームページの月平均アクセス数は8,490件に留まり、過去5年間で最低値を記録した。令和4・5年度の突出した実績（3万件超）からの反動はあるものの、この大幅な減少は入学志願者確保の観点から看過できない課題である。一方で、インスタグラムによる視覚的な日常発信や、地域商工会との連携動画は高い関心を得ている。 今後は、情報の網羅性を担うホームページと、学校の魅力を直感的に伝えるSNSの特性を明確に使い分け、広報戦略を再構築することが急務である。ホームページの内容刷新と更新頻度の向上に注力し、正確な情報を迅速に届ける体制を整える。インスタグラムでは動画コンテンツをさらに強化し、生徒の活動を魅力的に発信する。ジオパーク推進や街づくり事業など、地域と連携した取組を一体的に発信することで、本校の認知度向上と志願者の増加を図っていく。	【成果指標】 本校のSNSアカウント（鶴高インスタグラム）の更新に対し、積極的かつ肯定的な反応を示し、多くの方が閲覧している。令和7年度のインスタグラム投稿100件に対し、平均約10,000件の閲覧があった。本年度は20％の増加を目指したい。	SNSアカウント（鶴高インスタグラム）の「グッド」数が、平均で150件以上を維持しつつ、「投稿の閲覧者平均」を A　12,000件以上 B　10,000件以上12,000件未満 C　8,000件以上10,000件未満 D　8,000件未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に集計する。
	②　「総合的な探究の時間」の活動を通して、生徒が興味・関心を持つ分野の課題に気づき、その問題の本質を考え、解決方法の検討等に取り組む学習活動を充実させていく。	進路指導課	生徒が探究型学習の形で、興味関心を持つ分野や地域課題の解決をテーマに取り組む機会を大幅に増やす。1年生においては、探究スキルをしっかり学び、探究型学習の手法に慣れるための機会を設ける。2・3年生においては、どのような課題があるのか、課題の背景や取組を理解し、解が一つでないことを知り、各自がそれらに対してどのように関わって地域や社会、環境等に貢献をしていくのか、そして、話し合いや発表等、意見交換を通して多様な視点から考察力や表現力、協働する力を向上させることを目指した取組を推進していく。	【努力指標】 生徒が活動に、主体的・協働的に参加している。	「総合的な探究の時間」の活動において、積極的に取り組むことができた生徒の割合が、 A　80％以上 B　70％以上80％未満 C　60％以上70％未満 D　60％未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 （生徒アンケート）
	③　生徒・教職員が一体となり、手取川歩行や花いっぱい運動、地域のボランティアや小中学校と連携した活動を通して、地域とのつながりを深めていく。	生徒課特活 総務課	ボランティア活動への参加状況は、前年同期と比較して特に3年生の減少が目立つ。活動が一部の部活動やコース単位に留まっており、全校的な広がりを欠いていることが課題である。一方で、教職員の地域連携に対する意識は前年より向上しており、小中学校や地域社会との交流深化は、本校のイメージ向上や生徒募集に資する重要な取組として認識されている。今後は、一部の生徒だけでなく全校生徒に活動の意義を浸透させ、地域に貢献する姿勢をいかに育むかが今後の重点課題となる。 具体的取組として、赤い羽根募金や一六市販売、野外活動等のボランティアを継続・拡充するとともに、地域探究会のジオパーク活動や部活動の合同練習など多面的な交流を推進し、その成果を鶴翔祭等で発表することで、生徒の意欲向上と活動の啓発を図る。組織的な実践を通じ、地域に信頼され、選ばれる学校づくりを推進する。	【努力指標】 生徒・教職員が積極的に小中学校や地域と連携する活動に参加している。	学校行事や課外活動において、地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組むことができたと思う生徒・教職員の割合が、 A　70％以上 B　60％以上70％未満 C　40％以上60％未満 D　40％未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 （生徒・職員アンケート）

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	実施状況の達成度判断基準	判定基準	備考
4 教職員自らがこれまでの働き方を見直し、業務の効率化、精選を図る。限られた時間の中で、教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保し、教育の質的向上につなげる。	① 各教職員が自らの勤務時間や業務内容を的確に把握するとともに、毎月の業務の流れの中で先を見通し、区切りを意識した計画的・効率的な遂行に努める。	教頭 全教職員	学習活動や部活動の指導の質を維持・向上させつつ、計画的な取り組みよって時間外勤務を削減できたと回答した職員の割合は68.8%に留まり、低調な結果となった。 時間外勤務が月80時間を超えた職員は、延べ18名（実人数7名）であった。前年同期と比較すると、実人数では1名減少したものの、延べ人数では3名の増加となっている。月別の推移を見ると、7月（3名／1名減）、9月（2名／3名減）は減少した一方、4月（2名／2名増）、5月（2名／2名増）、6月（4名／2名増）、12月（2名／1名増）は増加した。なお、8月と11月は0名、10月は3名で、前年と同数であった。 さらに、時間外勤務が45時間以下の職員の割合は64.3%と、前年同期比で10.6ポイント減少した。これにより、近年続いていた改善傾向に歯止めがかかる形となった。 学期始めや部活動の大会期間等の時期では依然として超過勤務状態にあるが、月80時間以上超過勤務ゼロ、月45時間以下の増加を実現するために、職員会議日に加え中間考査後の面談週間における短縮日課の設定、定時退校日の割振りによる確実な遂行、部活動の計画的な運営等、業務整理による残業削減を図っていく等、より堅実な遂行に努めていく。	【努力指標】 教職員一人一人が自らの勤務時間を把握し、業務内容を精査して計画的・効率的に取り組み、時間外勤務が削減されている。	学習活動や部活動への指導の質の向上を図りつつ具体的な計画や取組を行い、時間外勤務を減少することできた教職員の割合が、 A　85%以上 B　75%以上85%未満 C　65%以上75%未満 D　65%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 （教職員アンケート）